

臨牀實驗

結核患者ノ月經前熱ニ對スル觀察竝ビニ植物性  
神經的檢索

東京市療養所醫局

太田良海

目次

- 一、緒言
- 二、月經前熱患者ノ頻度
- 三、月經前熱患者ト對照患者トノ間ニ於ケル諸症狀ノ比較
- 四、植物神經系ニ關スル反應

○緒言

結核病ノ經過ハ各患者ニ於テ千差萬別ナルガ是一面結核菌ノ毒力傳染方法混合傳染ノ有無又ハ其性質等ニヨリ他面ニハ患者自身ノ身體ノ諸條件ニ左右セラル、コト勿論ナリ、而シテ此自身ノ諸條件ハ種々ノ因子ニ支配セラル、ト雖モ先天的乃至後天的ノ體質ハ正ニ最モ考慮スベキモノ、一ナリ而モ極メテ興味多キ且又未ダ開拓ノ餘地多キ領域ニ屬スルモノ、如シ。

余等此方面ノ研究ニ興味ヲ有シ先ヅ女性結核患者ト體質トノ關係ニ就キ聊カ檢索スル所アリ就中月經前熱患者ト植物性神經系統ノ關係ニツキ略々一定セル成績ヲ得タルヲ以テ茲ニ報告セントス。

甲、諸學說

乙、檢査ヲ行ヒシ方法

丙、檢査成績

五、結論

### ○月經前熱患者ノ頻度

女性結核患者ニハ往々月經前月經中及其直後ニ體溫ノ上昇ヲ見、就中、月經前體溫上昇ヲ見ルコトハ所謂月經前熱トシテ既ニ知ラレタル事實ナルガ其頻度ニ就テハ諸報告ノ間ニ著シキ相異アリ、例ヘバ Sabourin ハ總テノ女性結核患者ハ月經ニ關聯セル體溫上昇ヲ見ルト云ヘバ Schiffer ハ之ヲ稀ナリト報告セルガ如シ而シテ此兩極端ノ間ニハ五六% (Wiese) 五〇% (Macht) 四〇% (Brauning) 等ノ報告アリ。

元來結核患者ノ月經前熱ノ意義ニ就テハ諸説アリ Turban Sobomin Krauss 等ハ前熱ヲ結核ノ活動徵候ナリト唱フルモ Riobold. Dusk, Galiノ諸氏ハ之ニ反セリ、然ルニ Schickelc ハ健康婦人ノ  $\frac{1}{3}$  ニ月經前ノ微熱ヲ見 Lennett. u. Caussiman ハ  $\frac{2}{3}$  ノ月經前熱者ヲ發見セリト其他 Culs. Oppenheimer. Ross-Johnson 等モ亦健康女學生ノ數ヶ月ニ互リテノ検査ニ於テカ、ル婦人ヲ多數見タルコトヲ報告セリ。

余等ハ東京市療養所ノ患者ニ此月經前熱ノ頻度ヲ調査セルニ十六歳ヨリ四十六歳ノ間ニテ高熱ナク榮養モ不良ナラザル婦人患者七十名中月經前熱ナキモノ五十一名有ルモノ十名即チ二十七%ナリモ然ルニ月經前熱ナキモノ五十一名中ニハ無月經患者十四名ヲ混ジ居レルヲ以テ之ヲ除キテ月經アル患者ノミニ就キ頻度ノ百分率ヲ見レバ月經前熱患者ハ四八・二%ニ相當シ約半數ニ近キ婦人ニ於テ之ヲ認ムルト云ヒ得ヅク Machtノ調査ニ略々一致セリ。

### ○月經前熱患者ト對照患者トノ間ニ於ケル諸症狀ノ比較

余等ガ諸症狀ニ就テ精査スルヲ得タル患者ハ總計四十二名ニシテ月經前熱患者十九名、月經前熱ナキ患者十三名、無月經患者十名ナリキ、而シテ是等ハ皆通常三七・五度以下ノ微熱カ又ハ殆ンド平熱ノ經過ヲトレル者ノミナルハ勿論ナリ。又テ月經前熱患者十九名(便宜上「甲組」ト名ヅク、以下單ニ甲組トアルハ之ヲ指ス)月經前熱ナキ者十三名(「乙組」ト名ヅク)ヲ比較セルニ次ノ如シ。

- 一、年齡、初經年齡、結婚セルモノカ否カ、分娩ノ有無等ノ關係ニ於テハ甲、乙兩組ノ間ニ大差ナキモノ、如シ。
- 二、月經ノ狀況其物ニモ兩組ニ大差ナシ。

- 三、月經ノ日數ハ區々ニシテ一日ヨリ七日迄ノ間ニシテ多クハ四乃至五日ナリ、之モ兩組ニ略々等シ。
- 四、甲組ニ於テハ月經前熱ノ期間ハ四乃至五日、ヨリ永キハ十日或ハ十四日ニ及ブ者アリ。
- 五、月經ノ日數ト前熱期間日數トノ間ニ何等カノ關係アリヤ否ヤヲ見ルモ一定ノ關係ヲ見出サズ。
- 六、同一患者ニテモ月經日數永キ時前熱日數永キカト云フニ然ラズ又此反對等ノコトモナシ。
- 七、月經前月經中又ハ其後ノ氣分等兩組ニ大差ナク婦人科の疾患ノ有無モ然リ。
- 八、結核ノ病期病型喀痰中菌ノ有無榮養、平素ノ體溫又ハ現在マデノ病勢等ニ就テ比較スルモノ差異ナシ、又尿所見(蛋白、糖尿等)ノ検査(甲状腺ノ狀況、ビルケ反應等)ニモ大差ヲ見ズ。
- 九、只月經ノ順不順ニ就テノ比較ニ於テ甲組ヨリ乙組ノ方ニ不順ナル者稍々多カリシ事ト同僚涌谷君ノ好意ニテ知り得タル血清輸環反應及沈降反應ノ陽性率ガ乙組ニ於テ幾分低カリシ事ノ二點ニ差ヲ見シノミ。

#### ○植物神經系ニ關スル反應

結核ニ於ケル植物神經系ノ研究ハ又多クノ學者ニヨリテ各國ニ於テ研索セラレシ處ニシテ我國ニ於テモ渡邊、春木諸氏ニヨリテナサレタリ、然シテ大體ニ於テ皆潜伏性又ハ停止性ノ患者ニ於テ交感神經機能亢進ヲ認め稍々進行性ニ赴クニ從ヒテ交感神經機能ノ低下ヲ來スト云フ、又病狀ノ進行セルモノニ於テハ全植物神經機能ノ低下ヲ來ストナセリ。

然シテ又婦人ノ月經ト植物神經系ニ就テノ研究モ多クノ學者ノ研究アリ、Brakeニヨレバ月經ハ植物神經系ノ不調和ヲ來スモノニシテ即出血、體溫下降、遲脈、血壓下降等ノ植物神經系支配下ノ各症狀ヲ呈スト、然シテ又月經中ハ「アドレナリン」ノ興奮性減弱「ピロカルピン」ニ對スル興奮性増大「アトロピン」ニテハ興奮性増大ヲ來スト然ルニ月經前ニ於テハ殆んど之ト反對ノ現象ヲ呈セリトノ報告アリ又 Stephen Somogyi senior ハ月經ト結核ナル論文ニ於テ、月經經過ト結核ノ症候學トノ間ニ一ノ密接ナル關係アリ即植物神經系ノ平衡移動ニヨリテ之ヲ説明シ得ラル、モノナリト又滲出型ニ於テノ現症判定ニ就テ患者ガ月經前ニアルカ又ハ中間期ニアルカヲ定メザル可カラズト又「ワゴトニー」ノ傾向アル者ニテハ月經期ナルカ中間期ナルカヲ定メザル可カラズト云ヘリ。

Westphaleus, Hirschmann, Adler 氏等ニヨレバ月經トハ出血時期ノヲ云フニ非ズ卵巢ノ準備期間ヲモ加ヘザル可ラズト又月經ヲ内分泌諸臓器ト密接ナル關係ニ置ケルハ卵巢ガ一ノ内分泌臓器ナルヲ以テ見テモ想像スルニ難カラズ、之ニ就テ Cristalette, Stolper, Adler 氏等ハ卵巢「ホルモン」ハ副腎系統ニ抑制的ニ作用スト云ヒ Adler ハ副腎系統ハ卵巢機能ノ減退期ニハ高度ノ感受性ヲ呈スト Stolper ハ又植物性神經系ニ就テ卵巢ハ「ワゴトニー」ヲ高張スル如ク作用シ黃體ノ分泌ハ(卵巢機能ニ抑制的ニ作用スル)「ジンバチコトニー」ヲ高張セシムト、然シテ故ニ黃體ノ活動期即月經前期ニハ臓器ハ「ジンバチコトニー」性ニナリ黃體ノ機能減退期即出血期ニハ「ワゴトニー」性トナルト云ヘリ、又同氏ハ Haltungs Klinick ニ於テ實驗シ「アドレナリン」反應ヲ見タルニ出血前期ニ於テハ速脈高血壓等ヲオコセルモ間歇期ニハ陰性ナリシトイヒ又「ワゴトニー」者ニテハ陰性ニテ「ジンバチコトニー」者ニハ之ヲ高張セシメタリト報告セリ、又 Somogin 氏ハ滲出性結核患者ニ於テ月經前ノ症狀亢進ハ月經出血ニヨリテノ病勢進行又ハ病原體ノ毒力ノ亢進ト説明スルヲ得ズト。又同氏ハ月經前期ニ於テ著明ナル體溫上昇ハ交感神經緊張性滲出性結核患者ニノミ見ルヲ得タリ、之ニ反シテ迷走神經緊張者ニ於テハ體溫上昇ハ殆ンド見當ラザリキト云ヘリ、是等ノ說ヲ見ルニ月經ガ如何ニ植物性神經系ニ大ナル關係ヲ有スルカラ知リ得ベク、又體溫調節中樞ガ内分泌臓器竝ビニ植物性神經系ニ密接ナル關係アルヲ見レバ結核患者ノ月經前體上昇ナルモノモ亦植物性神經系ニ大ナル關係アルヲ想像セシム。

### ○検査ニ行ヒシ方法

アシユチル氏現象即眼球壓迫試験。之ハ兩眼ヲ指頭ニテ壓シ試験前ノ脈搏數ト試験中及試験後ノ脈搏數ヲ比較セリ結核患者ハ多クハ運動又ハ精神上ヨリ一時的速脈ヲ來スコト多キヲ以テ皆病牀ニ横臥セルマ、ニテ試験シ、殊ニ試験前ハ患者ノ落付キタルヲ見テ脈搏ヲ數回數ヘ試験中及試験後ニモ同様ニ數ヘ少クトモ此試験ヲ三回行ヒテ比較シ、明カニ一分間五以上ノ脈搏減少アルモノヲ陽性(十)トシ、他ハ陰性(一)トセリ、然シテ「ワゴトニー」患者ニ於テハ本反應陽性ナルヲ通常トス。

レウキー氏現象、即「アドレナリン」點眼ニヨリテ瞳孔ノ散大セルヲ見ルモノニシテ、之ニテハ結核患者ニ於テハ時ニ腫

孔左右不同アルヲ以テ先ヅ點眼前「バビー」氏瞳孔計ヲ用ヒテ左右共測定シ置キ「アドレナリン」點眼ニヨリテ直後及五分十分二十分ノ間隔ヲ置キテ檢セリ、然シテ明カニ點點セル側ノ瞳孔ノ散大セルヲ陽性トナシ、然ラザルヲ陰性トセリ。「ジンバチコトニー」者ニ於テハ本反應陽性ナルヲ常トス。

検査成績

アシユテル氏試験ニ於テハ甲組(月經前熱アル者)ニ於テ十六名中全部陰性ニシテ一〇〇%ナリ又乙組(月經前熱ナキ者)ニテハ十三名中陽性八名(約六二%)陰性五名(三八%)ナリ是等ハ皆月經後即間歇時ノ試験成績ナリ。

レウキ一氏試験ヲ見ルニ甲組ニテハ十九名中陽性十二名即(六三%)陰性七名(三七%)ナリ之ヲ二組ニ見ルニ乙組ニテハ十三名全部ノ陰性ヲ見タリ、之モ亦月經間歇時ノモノナリ。

月經前月經後ノ隔期的検査

月經前月經中及月經後ノ三時間ニ就テ比較試験シ得タル患者ハ甲組十二名乙組十名ナリ。

表 一

	月 經 前		月 經 中		月 經 後	
	甲 組	乙 組	甲 組	乙 組	甲 組	乙 組
L+A-	11	3	4	2	7	0
	92%	25%	33%	17%	58%	0%
L+A+	0	4	1	4	0	7
	0%	33%	8%	33%	0%	58%
L-A-	1	5	6	5	5	5
	8%	42%	50%	42%	42%	42%
L+A+	0	0	1	1	0	0
	0%	0%	8%	8%	0%	0%

之ハ第一表ニ示セル如シ、然シテア氏反應、レ氏反應ノミヲ以テ直ニ「ワゴトニー」者、「ジンバチコトニー」者ト斷定シ得ルモノニ非ザレバ此尙各種ノ檢索ヲ要スルコトハ勿論ナルモ、L(十)A(一)者ガ月經前ニ於テ甲組ニ多ク乙組ニ少ク、L(一)A(十)者ガ甲組ニ無ク乙組ニ稍々多キヲ見タリ。及

月經中ニ於テハ甲組ニモL(十)A(一)者ハ減ジ乙組ニモ減ゼルヲ見、L(一)A(十)者ガ甲組ニ於テ増加シ乙組ニハ等シキヲ見タリ。又月經後ニ於テハ再ビ甲組ニL(十)A(一)ヲ増シ乙組ニ於テハ明ラカニL(一)A(十)者ヲ増セルヲ見タリ。之月經前ハ一般ニ交感神經緊張ヲ示シ、月經中ハ迷走神經緊張ヲ示ストノ說ニ何等カ一致セルガニ見ユ。然シテ又患者中中途退所又ハ死亡ノ爲、月經ノ前、中、後三回ヲ完全ニ試験シ得ズ、又ア氏反應及ビレ氏反應ノミヲ檢

第二表

	月經前		月經中		月經後	
	甲組	乙組	甲組	乙組	甲組	乙組
A+	0	5	3	5	0	8
	0%	38%	23%	41%	0%	62%
A-	14	8	10	7	16	5
	100%	62%	77%	59%	100%	38%
L+	16	3	7	3	12	0
	94%	21%	50%	21%	63%	0%
L-	1	11	7	11	7	13
	6%	71%	50%	79%	37%	100%

第三表

	無月經狀態ニアル患者	
	甲	乙
A+	8	80%
A-	2	20%
L+	1	10%
L-	9	90%

第四表

	月經前		月經中		月經後	
	甲	乙	甲	乙	甲	乙
L+A-	4	1	3	0	3	0
L-A+	1	2	1	2	1	3
L-A-	1	0	0	0	0	1
L+A+	0	0	0	0	0	0

セル者二三アレバ之ヲ加ヘア氏反應及レ氏反應ノ各ヨリ之ヲ見ル時ハ次ノ第二表ニ示セル如ク、ホゞ同様ニ解スルコトヲ得ルナリ。

又無月經患者十名ニ於テハ第三表ニ示ス如クA(十)多ク、又L(一)者多カリシヲ見ル。

又健康者十名ニ於テハ第四表ニ示ス如ク前熱アル者六名、無キモノ四名ナリシガ各ア氏反應、レ氏反應ヲ檢セルニ、月經前ニ於テハ甲組ニ於テL(十)A(一)者多ク六名中四名ヲ得、乙組ニ於テハL(一)A(十)ナルモノ三名中二名ヲ得タリ月經中ニ於テハ甲組ニA(一)L(十)者四名中三名ヲ乙組ニテハA(十)L(一)者二名中二名ヲ得タリ月經後ニ於テハ甲組ニテL(十)A(一)者四名中三名、乙組L(一)A(十)四名中三名中三名ヲ

得タリ之健康者ニ於テハ例數少クシテ確言スルコトヲ得ザルモ大體ニ於テ前熱アル者ハL(十)A(一)ナル者多ク無キモノニ於テハL(一)A(十)ナルモノ稍々多キカト思ハル尙健康者ハ皆「レントゲン」検査及物理的検査等ニヨリテ異狀ナキヲ確カメ又種々ノ勤務ニ堪エ何等ノ症狀ヲ呈セザルモノヲ選ビシモノナリ。

○結論

- 一、月經前熱患者ノ頻度ハ月經前熱無キ患者ニ比シテ四八・二%ニ相當ス。
- 二、月經前熱患者十九名、月經前熱無キ者十三名ノ年齢、初經年齡、月經時ノ狀況及ビ結核ノ病期病勢病型榮養平素ノ體溫ノ状態尿所見等ニ就テ檢スルニ兩者ニハ著差ヲ認メズ。

三、月經ノ順、不順及涌谷氏血清神環反應沈降反應ニ於テ兩者ノ間ニ多少ノ差ヲ見シノミ。

四、アシユチル氏試驗ヲ見ルニ甲組ニ於テ十六名全部陰性ナリ、然ルニ乙組ニ於テハ十三名中陽性八名、陰性五名ヲ得、レウキー氏試驗ニ於テハ甲組ニテ十六名中陽性十名、陰性六名、乙組ニテ陽性ナリ十三名全部陰性ナリ。

五、月經ノ前出血時及出血後隔期的試驗ニ於テハ甲組ニ於テハ明カニ月經前ニ於テL(十)A(一)多ク月經中ハL(十)A(一)ハ減ジL(一)A(十)ヲ加ヘ月經後ハ又舊ニ復セリ、然ルニ乙組ニ於テハ月經中トノ間ニハ大ナル差ヲ見ザリシモ月經後ニ於テL(一)A(十)ヲ増加セリ。

六、次ニア氏反應及レ氏反應ノミノ側ヨリ見ルニ、前記ノ成績ト大體一致セリ。

七、無月經患者ニテハA(十)多クL(一)者多シ。

八、健康者ハ少數例ナリシモ前熱者六名、無キモノ四名ヲ得、之ニ就テモ亦甲組ニ於テL(十)A(一)多ク、乙組ニ於テハ大體L(一)A(十)ナル者ノ方多シ。

九、月經前熱ノ現象ハ健康者ニモ屢々見ルコトナルガ故ニ恐ラク體質的ノモノナルベク、結核罹病ノ爲メニ此體質的現象ガ促進セラル、コトモ可能ナレドモ其影響ノ程度ハ著シカラザルモノ、如シ、何トナレバ月經前熱ノ頻度ガ結核患ト健康者トノ間ニ著シキ相異ナキモノ、如ケレバナリ。然レドモ所謂健康者ニ於ケル月經前熱ガ潜伏結核ニヨリテ助長サレ居ルコトモ可能ナルヲ以テ、此間ノ消息ヲ闡明セン爲ニ潜伏結核ヲ全然否定シ得ル處女地ノ婦人ニ就テ研究スルヲ得レバ好都合ナリ。

十、結核患者ニ於テ月經前熱アルト無キトノ差異ガ結核病機ニ如何ナル影響アリヤハ此業績ノ範圍ニハ不明ナリ。本試驗ハ主トシテ東京市療養所ニ於テ遠藤繁博士ノ御指導ニヨルモノニシテ所長田澤博士及遠藤博士ノ御校閲ヲ得タリ以テ兩先生ニ厚ク感謝シ尙醫局諸兄ヨリノ多大ナル御援助ニ深謝ノ意ヲ表ス。

本成績ハ第六回日本結核病學會ニ於テ發表セルモノナリ(本文及表中、Aハアシユチル反應Lハレウキー反應ヲ表ハスモノナリ)。

## 文 献

- 1) **Stephan Somogyi-Sentor**, (Menstruation u. Tuberkulose Beit. z. Kl. d. Tbc. 1924. Bd. 59). 2) **Beekmann**, (Lungentuberkulose. u. Menstruation Z. Schr. f. Tbc. B. 52. H. 4). 3) **Hans-Alexander**, (Fritterag. L. Tbc. 1927). 4) **Fritz Haese**, (Lungentbc. u. Mensueller Zpkldr. Beit. z. Kl. d. Tbc. Bd. 66. H. 4). 5) **Trentini Siviis**, (La febbre menstuale nella tubercolosi polmonare Policlinico, Sez. porat. Jg. 34. H. 10). 6) **Runge, H.** (Tuberkulose u. Genitalzyklus der Fran. Munden med. W. Nr. 44. 1927). 7) **Rishberg**, (Pulmonaly Tuberculosis). 8) **Heinrich Higier**, (Vegetative Neurology). 9) **Pattenger**, (Clinical Tuberculosis 1917. 10) **W. Wegener** u. **Pannplum**, über das Aschersche Bulbusdruckphänomen. D. M. Wsch. 54. Y. G. N. 23. 1928. 11) **春木**, (ツブスチマトニー及プロエトニー中外醫. No. 1011). 12) **上田**, (植物性神経系知見ノ現況. 治療及處方. 大正 14 年.) 13) **上田**, (帝國海軍ニ於ケル胸膜炎ノ研究. 第二報. 胸膜炎及肺結核ニ於ケル植物性神経系統ノ機能状態ニ就テ. 船核. 6 卷. 7 號). 14) **白木**, (植物性神経系統. 東西醫. 昭 3—昭 4).



## 抄録

## 結核専門雑誌

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose, Bd.

72, H. 6, 1929.

## 1. BCGノ毒力問題研究

O. Kirchner u. E. A. Schneider (Hamburg)

BCGノ毒力が動物体内ニ於テ如何ニ變化スルカ、或ハ全ク變化ナキカノ問題ハ數年來實驗ヲ試ミラレ、毒力ヲ増ストスルモノト、増サズトスルモノトアリ。著者等ハ増サズトスル派ニシテ、之レガ爲メニ家兎ノ眼角膜ヲ用ヒ之レニ十代三九〇日間繼續移植セルモノ(A10ト稱ス)ヲ天竺鼠ニ接種シテ對照トノ間ニ差ノ有無ヲ檢セリ。之レニ依レバ其間差無シ。故ニ毒力ヲ増サズ。但此際各代ノ移植ハ常ニ膿瘍ヲ生ズルモ未ダ之レニ血管ヲ生ゼザル以前ニ次代ニ移セリ。故ニ毒力昇ラザルハ或ハ血行ニ曝サレザリシ爲メナルヤモ知ル可カラズトナセリ。而テ角膜ニ於ケル病變ハ接種菌量ニヨリテ大體三種ニ區別セラル。第一型ハ菌量〇・〇〇〇五疋ニシテ全經過一四〇日。最も盛ナル膿瘍ノ時期ハ六〇乃至八〇病日ナリ。虹彩炎モ亦之レニ伴ヒテ經過六〇日ニ及ベリ。第二型ハ〇・〇〇二疋全經過百日ニシテ膿瘍期ハ第四〇乃至六〇日間、虹彩炎ハ大體四〇日。第三型ハ三疋。全經過七〇日。炎症ハ急劇ニ増悪シ、膿瘍期第十乃至三十日間ナルモ、比較的速クニ消滅ス。而シテ第二次感染ニ對スル免疫増進ノ度ハ必シモ大量ヲ要セズ。(岡抄)

## 2. 肺結核ニ際スル結核菌ノ毒力ニ就テ

W. Roloff u. W. Pagel (Charlottenburg)

肺結核患者ノ喀痰ヨリ純培養セル菌株三三株ニ就テ其毒力試驗ヲ天竺鼠ニ行ヘリ。著者等ハ二様ノ方法ヲ用ヒタリ。一ハ初感接種菌ノ病變ノ現ハル、迄ノ時間ニヨリ、二ハ組織學的ニ接種菌及ビ局所淋巴腺電ヲ比較セリ。接種菌量ハ〇・〇一疋皮内注射ニシテ大體五乃至九日ニシテ病變現ハル。猶此内七種ハB. Lange氏自ラ其ノ所謂ランゲ氏法(〇・〇〇〇〇一疋皮内注射、病電出現迄ノ時間ニヨリ)ニテ試ミタリ。其成績ニヨレバ何レノ方法ニ於テモ毒力ト患者ノ病型、病變、經過トノ間ニハ何等ノ特種ナル關係ヲ見出スコト能ハズ、病症ハ全ク個體ノ自然免疫或ハ抵抗ニ關係スルコトヲ明カニセリ。(岡抄)

## 3. 肺外結核ヲ合併セル成人肺結核ノ病電分

## 布及ビ經過ニ就テ

R. Braun (Davos-Dorf)

成人肺結核ニ肺外結核ヲ合併セル一三二例ノ調査ナリ。三分一ハ鎖骨下ニ結核病變アリ。六〇例ニ喀痰中結核菌陽性。又肺結核發病後肺外結核ヲ併發シ來レル例ノ四七・八%ハ現在猶獨性ナリ。故ニ從來唱ヘラレタル肺外結核ハ肺結核ヲ治癒ニ趣カシムトノ考ヘハ誤レリ。ノミナラズ肺結核ノ増悪シツ、アル例多シ。但滲出性肺結核ハ少シ。熱其他所謂毒性現象ヲ見ルモノ五〇%ナリ。病電ノ位置ニハ關係ナシ。大多數ハ「アレギー」強シ。(岡抄)

## 4. 氣管枝造影法術式補遺

W. Curschmann

著者ノ考案ニナレル絹製「カテーテル」ニ金屬製帽子ヲ附屬セシメ、金屬製「マ  
ンドリン」ヲ挿入シ、自由ニ其彎曲ヲ變ジ得ルモノヲ用ヒ、上喉頭神經ノ傳達  
麻酔、咽喉及氣管ノ噴霧麻酔(コカイン)ノ下ニ之レヲ氣管ニ送入ス。求ムル  
氣管枝ニ之レヲ入ル。送入操作後「レントゲン」照射ニテ其ノ位置ヲ確カメ「マ  
ンドリン」ヲ去リテ「ヨザビム」ヲ注入ス。

### 5、肺結核ノ臟器療法

F. Matrausch (Wien)

Bierノ臟器療法即 Organetherapieノ意味ニテ脾ノ全「エキス」ヲ用ヒシ  
成績ノ豫報ナリ。Splenotratナル製劑ヲ用ヒ、經口のニ三八例ニ試シ、三六  
例ニ卓效アリタリト云フ。猶目下研究中ナリ。

### 6、アスコリ氏同時兩側氣胸ノ研究補遺

F. Giuffrida (Catania)

縱隔竇ノ移動性多キ場合ニ非患側ニ縱隔竇支持ノ目的ニテ行フノ外、患側ニ  
癒著アリテ氣胸不完全又ハ困難ナル時、同時ニ他側ニモ入ル、時ハ空洞ヲ壓  
縮スルニ有效ナリ。

### 7、肺ノ化膿性疾患ノ療法トシテ靜脈内ニ

#### 「チモール」注射ヲ行フ方法

P. Bonem (Stuttgart)

特許名 Pulmothymol ナル「チモール」ノ「クロイツ」(○・七%)ヲ「クルツ」  
性肺炎、氣管枝肺炎、肺膿瘍等ニ用ヒテ有效ナリ。急性腎孟炎、流行性腦炎  
ニハ效ナシ。

### 8、早期閉性肺結核ノ病因。診斷及療法ニ就

テ

B. M. Chmelitzky, S. M. Silber u. F. M. Abramowitsch  
(Charkow)

著者等ハ二六例ノ肺結核ヲ引例シテ、近年ノ新舊學說ニ批判ヲ加ヘ、更ニ肺  
石ヲ喀出スル患者ノ病症ヲ述ベタリ。大體ニ於テ新學說ニ賛意ヲ表示セル  
モ、其病因論ハ今猶不明ナリトナセリ。肺石(S. EhrlichノTetradeト稱ス  
ルモノ、即、石灰沈著、彈力纖維ノ石灰變性、「ビヨレストリ」沈著。結核  
菌ノ存在ノ四要素ニヨリテ名ヅク)ヲ喀出スル患者ニハ「レントゲン」診斷上  
滲出性病竈ヲ見ズ。豫後比較的良好ナリ。初メヨリ喀出スルモノハ恐ラク、  
一度被囊形成。限局セル石灰沈著竈ノ再燃ニヨリテ發病セルモノナル可シト  
ナセリ。早期ニハ安靜ニテ可ナリ。又壓縮療法(氣胸ノ如キ)奏效ス、空洞ヲ  
生ズルモノアリ。今後は等ノ諸型ヲ「ガスペンサリ」ニテ調査シ行ク必要ア  
リトナセリ。

### 9、體型ト結核

F. Ickert (Gumbinnen)

大體獨逸國內ニテ最モ擴ク用ヒラル、Kretschmerノ分類ヲ採用シ成人一六  
九〇、小兒(一五歳以下)九三四名ニ就テ、之レガ結核ヲ調査セリ。I、Asth-  
enischer oder leptosomer Typ. II、Pyknischer Typ. III、Muskulärer  
Typ.ノ體型ノ外ニ混合型多シ。此内第一型ニ最多シ、又混合型ニテハ第一  
第二ノ混合セルモノニ多シ。

### 10、Lapion(金製劑二九四九號 I. G. Farben- industrie)ヲ用ヒテセル肺結核ノ治療成績

P. Lotze (Sudharz)

同製劑ハ他ノ金製劑ニ比シテ良好ナルモ、喉頭結核ニハ禁忌ナリ。要スルニ完全ナルモノニハ非ズ又總テノ場合ニ用ヒ得ズトノ簡單ナル報告ナリ。(岡抄)

## 11、兩側氣胸例ノ分婣

W. Roloff (Sommerfeld)

兩側氣胸ヲ行ヘル兩肺上葉ニ病竈アル患者ガ無事ニ分婣セル簡單ナル臨牀的  
一例報告ナリ。(岡抄)

## Beiträge zur Klinik der Tuberkulose, Bd. 73.

H. 1, 1929.

## 12、横隔膜神經手術六〇〇例ノ經驗

Dr. Amandus Wirth, Dr. Gertrud Köhn von Jaski.

一九二三年十月ヨリ外科醫ニ依頼シ六〇〇例ノ婦人患者ニツキ横隔膜神經手術ヲ施行ス。患者ノ病期ハI、六名、II、九八名、III、其他ニテ六〇〇例中喀痰内ニ結核菌ノ證明サレタルモノ五六二例ナリ。兩側肺侵サレタルモノハ、重篤ニテ空洞ヲ有スル側ニ行ヘリ、此ノ爲ニ輕度ニ侵サレタル側モ屢々輕快ニ赴クヲ認ム。人工氣胸ノ適應ニシテ種々ノ事情ノ爲療期ヲ完了スル事能ハザル場合ニモ行ヘリ。本法施行後、一乃至二ヶ月ヲ經ルモ著シキ效果ナカリシ場合氣胸療法ヲ併合セリ。此時肺ハ適當ニ壓迫セラレ又充盈(Nachfüllung)ノ際空氣量ニ應ジテ横隔膜ハ下降シ吸收ト共ニ上昇シ(所謂 Freundノ自動的調節作用)爲ニ充盈ノ期間ノ増大ヲ計リ得タリ。本法ハ唯一回ノ手術ニテ完了シ(二)危險少ナク(三)職業生活ヲ妨グル事少ナキ點ニ於テ氣胸療法ニ優ル、抽出シタル神經ノ長サハ四二種最長ナリ。所謂 doppelte phrenicus トシテ

記載サレン横隔膜ノ直上部テ主幹ト結合セル例ハ五例アリ。著者ハ尙、副横隔膜神經ニ就テ其ノ經過ヲ觀察シタルニ其ノ存在ノ頻度ハ稍々 Felixノモノニ一致ス。追診ノ機會アリシ患者一七〇名ニツキ其ノ後ノ横隔膜ノ位置ヲ檢シタルニ二一樞以上抽出セルモノハ不變ナルモ以下ノモノハ長サノ短キ程多數例舊位ニ復セルヲ認ム。本法ヲ右側ニ施行セルモノ三一一例、左側二八九例ナリ、手術後胃腸症狀ヲ現ハセルモノ唯一例ニ過ギズ、最も多ク遭遇セル結核性合併症ハ喉頭結核ナルガ之ハ屢々手術後肺所見ノ輕快ト共ニ良好ニ赴ケリ。手術ノ禁忌症トナルハ腸腎臟結核、心臟病ナリ。術後、肺、脾、骨ノX線照射ヲ試ミシニ良好ニ思ハル。術後新浸潤、吸入病竈ヲ作りタルハ一例ナリ。成形術施行ノ前ニ必ズ本法ヲ施行セリ、又完全ナ治癒ノ爲ニハ成形術ヲ必要トス。輕快ノ目標トシテ喀痰内ノ結核菌消失、體重増加、下熱等ヲ觀察シタルニ六九例無熱トナリ、體重ノ平均増加五・九疋、結核菌ノ消失二六・五%相當ニ活動力ヲ恢復シタルモノ二七・二%ナリ。即チ重症例ノ割ニハ良好ナル成績ナリ。尙ホ特殊ノ適應症トシテ氣管枝擴張症、肺膿瘍ヲ舉グ。(池上抄)

## 13、肺虚脱ノ際ニ於ケル呼吸曲線の(Spirographische)研究。

### 第二報及ビ第三報

Dr. Anthony u. Dr. Heine.

著者ハ第一報ニ於テ肺活量、最大量、殘氣量ノ關係及ビ是等ガ一側氣胸ニヨリテ影響サル、次第ヲ述ベタガ第二報ニ於テハ一側性氣胸ノ場合ノ補氣、蓄氣及ビ呼吸容積ニ就テ報告ス、蓄氣補氣ノ量ハ一側性氣胸ニヨリテ影響セラ  
ルルガ規則的變化ハ見出サレヌ、安靜呼吸ニ於テ健者テハ體位ノ變換ニヨリ

其ノ呼吸量ハ變化スルガ氣胸ノ場合ハ健者ノ如ク著明テナク屢々全ク變化ナキコトアリ。第三報。一側氣胸ノ場合ノ正常活量。安靜呼吸ノ呼出狀態ニ於ケルヲ正常活量ト名付ク、之ハ殘氣及ビ蓄氣ヨリ成ルガ此ノモノハ氣胸ニヨリテ減少ス、而シテ其ノ減少度合ハ送入シタル空氣量ヨリモ少量デアル。

(池上抄)

#### 14、油胸ニ關スル實驗

Carl Waitz

家兎、海猿ヲ以テ實驗セリ、油トシテハ純「オリーブ」油、及ビ之ニ一〇%ノ割ニ「ゴメ」油、「ゴメノール」油ヲ混ジテ使用セリ。油ハ總テ體溫度トシテ用ヒシニ肋膜ニ甚シキ刺戟作用ヲ與ヘリ。二四乃至四八時間ニシテ剖見シタルニ油量ハ1/2位ニ減ジ其ノ「フルフロール」反應ハ陽性ナリ、肋膜ノ炎症ハ油量ノ多キ程又殊ニ「ゴメノール」油ヲ加ヘシモノニ於テ甚ダシ。注射後數日ヲ經テ剖見セルモノハ健側ニモ漿液ノ滲溜ヲ認ム。七週間豫メ氣胸ヲ以テ處置シ其ノ後、油胸ヲ行ヒ二十四時間ヲ經テ剖見シタルモノハ、油ノ吸收遅ク、「フルフロール」反應陰性又炎症モ輕度ナリ。故ニ肋膜ノ變化存セザル場合ハ油胸ヲ行ハザルヲ可トス、結核性膿胸ノ殘腔ヲ癒著セシムル目的ニハ良好ニテ瘻孔ヲ作ルコト殆ドナシ。油殊ニ「ゴメノール」油ヲ培地ニ加ヘ葡萄狀球菌、結核菌等ヲ以テ培養試驗ヲ試ムルニ何レモ其ノ發育不良ナリ。又油胸ノ後、其ノ肋腔ヨリ得タル液體ヲ培地ニ加ヘ培養試驗ヲ行フニ同様發育不良ナリ。又此ノ際結核菌ノ染色ハ不鮮明ニシテ油ノ影響ノ下デハ結核菌ハ其ノ抗酸性ヲ失フト云フ戸田氏ノ報告ニ一致ス。

(池上抄)

#### 15、五〇歳以上ノ肺結核患者ニ於ケル早期浸

抄 錄

#### 潤及ビ早期空洞ニ就テ

Emil Gierz

八年間ニ得タル一七例ノ老人結核ノ報告ナリ。五十歳以上デハ年齢ノ増加ト共ニ發病期ハ新シク五九例ハ發病一ケ年未滿デアル。他ノ老人病ノタメ診ヲ乞ヒ偶然ニ結核ノ發見サレタル例モ少クナイ。其ノ大多數ハ既ニ早期ニ感染シ又若年ノ折外部カラ再感染ヲ蒙ル機會モ多カツタ。然ルニ五十歳以上ニナツテ始メテ早期浸潤、早期空洞ヲ作ツテ來ルノハ外部カラノ再感染ト考フルニモ *endogene Reinfektion* ト考ヘタ方ガ妥當デアラウ。(池上抄)

#### 16、蒸シ暑キ事ノ肺結核患者ノ體溫ニ及ボス

影響

Sandor. puder.

一〇〇名ノ患者ノ中1/3ハ影響セラレタ。神經質ノ患者殊ニ婦人ノ夫レニ殊ニ多イ。婦人ハ一般ニ輕症ノモノガ影響セラル、ガ男子ハ病期ニハ關係ガナイ。又屋外ニアルト室内ニアルトノ關係ハ認メラレヌ。(池上抄)

#### 17、結核菌培養ノ續報

Theodor mathes.

六〇〇例ニ就テ行ハレシ實驗ニシテ、ホーン氏法ヲ推賞ス。培地ヲ作ル際加熱ノ弱キ程菌ノ發育速度ハ速ナリ。早く診斷ヲ附ス目的ニハ六乃至一〇本ニ培養シ、二乃至三日毎ニ一乃至二本宛掻キ取リテ鏡檢スベシ、大抵四乃至五日ニシテ結核ノ診斷ハ附シ得ラル。漿液樣ヲ細胞成分少ナキ材料ハ二〇%ノ「ズルフオサリチール」酸ノ滴下ニヨリ蛋白ヲ沈澱セシメテ行フ時ハ一層確實トナル。卵培地ハ黃色ノモノ程發育良好ニシテ卵黃ヨリ作りシ培地ハ卵白及

七二一

じ其ノ兩者ノ混合ヨリ作りタル培地ヨリモ發育速ナリ。空氣ト交通セシムレバ發育旺盛ナルモ純酸素炭酸瓦斯ヲ加ヘタル場合ハ發育不良ナリ。酸素ノ供給相當ニヨク、濕度充分ナル時ハ結核菌ハ一五・五ヶ月モ生存シ得、生理的食鹽水上ニ三六日間菌ヲ浮游セシメ、之ヲ培養スル時ハ發育不良ナリ、原因ニ關シテハ尙ホ不明ナリ。結核性肋膜炎ニテ罹患ノ始メニ得ラレシ滲出液ヨリ菌ハ培養サレタルモ其ノ後ノ穿刺液ヨリハ培養不可能ナリキ。組織學的ニ結核ノ診斷ヲ附シ得ザリシ材料ヨリ結核菌ヲ培養シ得タル二例アリ。「アウトロクチン」ヲ作り患者ヲ處置シタルニ疾患ニ對スル特殊ノ影響認めザリキ。結核患者ノ血液中ニ所謂抗素ノ存否ヲ知ルタメ種々ノ状態ノ患者ニ〇名ヨリ得タル血清ヲ以テ實驗ヲ行ヘリ、結核菌ノ一定量ヲ蒸餾水上ニ浮游セシ之ニ患者ノ血清一坵ヲ加ヘ三乃至九日間孵卵器ニ入レ置キ、其後之ヨリ培養セシニ病勢ノ状態ニヨル特殊ノ影響ヲ認めズ、併シ血清ヲ加ヘメ對照ニ比シ其ノ發育ハ緩慢ナリ。

### 18、「ツベルクリン」反應ニ關スル試験

J. Leitner.

「ツベルクリン」皮内反應ノ強度ハ必ズシモ結核進行ノ状態ノ目標トハナラヌ。「ツベルリクン」注射ノ前後、血液像ノ觀察ヲ併用スルコトニヨリ結核ノ活動性ヲ知り得テ診斷上價值大テアル、赤沈反應ニ對シテハ影響ガ少ナイ。

(池上抄)

### 19、結核抗體ノ證明ニ關スル理論及ビ實際 血清反應ノ簡易新法

G. F. Capuani.

血清反應ニ必要ナル個々ノ因子ニ就テ詳細ナル理論的説明及ビ實驗ヲ行ヒ肺結核患者ノ九〇%ニ對シ陽性率ヲ與フル新反應ヲ報告ス。(池上抄)

### 20、結核療法ニ硅酸ヲ用フル價值ニ就テ

Alois Rosenstingl.

罹患ノ輕度ニシテ合併症ヲ有セザル患者ニテ食餌療法ノ效ナキモノニ對シテ行ヘリ、其ノ結果、體溫、咳嗽、喀痰ニ對シ效果アリシ事ヲ報告ス。(池上抄)

### 21、「リパトレン」療法

Baumann.

物理療法、食餌療法ノ效ナキ患者四六名ニ對シ本法ヲ試ミタリ。〇一坵ヨリ次第ニ增量シ一坵ニ達ス、一週間二回ノ割合ニテ筋肉内ニ用ヒタリ。四六例悉ク全身状態、食慾、體重増加ニ對シテ好影響アリ、又加答兒症候モ著シク輕快セリ。赤沈反應ノ正常價ヲ示スニ及ビ本療法ヲ中止ス、本法ハ精密ナル觀察ノ下ニ行フベキモノニシテ外來患者ニハ使用セザルヲ可トス、本劑ハ結核治療ニ進歩ヲ與フルモノト確信ス。(池上抄)

Zeitschrift für Tuberkulose Bd. 54. H. 7,

1929.

### 獨逸結核豫防會中央委員會年次集會

一九二九年五月二十三日乃至二十五日ニ Bad Pyrmont ニ開催セラル。委員會ト第三十三回總會トニ分タル。

### 22、立法及行政上ヨリ見タル肺結核患者ニ於 ケル勞作不能、生業不能、病廢 (Invalidität)

業務不能ニ就テ

R. Unger.

演者ハ法律家トシテ表題ニ示セル事項ニ就キ立法及ビ行政上ヨリ之ヲ論シタリ。

(寺尾抄)

23、特ニ肺結核ヲ顧慮シテ傷害保險及國家救護後ノ生業不能ノ概念

W. Zielke.

演者モ法律上ノ立場ヨリ論ゼリ。

(寺尾抄)

24、醫師トシテノ立場ヨリ見タル勞作不能、生業不能、病癢及業務不能ニ就テ

W. May.

演者ハフンフールド肺療院ノ醫師ニシテ實際臨牀醫トシテ表題ニ就キ意見ヲ吐露ス。

(寺尾抄)

25、傷害保險法及國家救護法ニ關スル肺結核ニ於ケル生業不能ニ就テ

F. Hochstetter.

實地醫家トシテ生業不能ヲ説明ス。

以上ノ四氏ノ講演ニ次テ Stirtz, G. Katz, R. Engelsmann, Coerper, Ritter, Löhr, Schäffer, A. Hoffmann, Schroeder, Frankenburg, Dorn, Appellius, Becker 等ガ醫師又ハ法律家トシテノ立場ヨリ本題ヲ檢討ス。(寺尾抄)

中産階級結核豫防委員會講演

抄 録

26、實際上中産階級救護ノ必要アリヤ

W. Berghaus.

現今獨逸ニ於テ健康保險ニ加入シ得ザル中産階級ニ於テハ疾病殊ニ肺結核ノ如キ慢性疾患ニ罹病スルニ當リ其治療上大ナル難境ニ陷レリ。現下ノ獨逸結核豫防協會ノ仕事ニテハ到底満足シ得ルトコニアラズ。速ニ具體的對策ヲ講ジテ之ガ救濟方ヲ講ゼザルベカラズ。

(寺尾抄)

27、Braunschweig 協會長トシテ得タル中産階級結核救護ノ經驗

W. Kleinkecht.

Braunschweig ノ中産階級ニ於ケル結核撲滅ニ就テハ大戰前多少ノ施設ヲ行ツタガ一時中絶ヲ來シタ。大戰中協會ヲ設ケテ事業ヲ繼續スルヲ得タ。現下ノ中産階級ハ疲弊シテ居ルガ將來ハ治療院受療ノ補充ヲナスニ止マラズ家庭治療、營養改善等ニ向ツテ大ニ努力シヤウ。是等ニ對シ Madsen, Sedlmyer, Stuertz ノ追加アリ。

(寺尾抄)

Dettweiler 財團理事會

中産階級委員會ニ引續キ開カル。

第八回結核救護所會議於 Bad Pyrmont 24/VI(1929)

會長 Hamel ノ開會ノ辭ニ次テ次ノ講演アリ。

28、結核救護所ニ於ケル感染豫防

K. W. Jotten.

十二三

救護所ヲ訪フ患者ハ結核菌ヲ室内テ嚔出シテ醫師、看護婦、消毒夫、其他所員ハ之ニ感染スル機會ガアリ得ルモノデアアル。此危險ヲ避クルニハ従業員ノ過勞ヲ避ケ、又人員ヲ増加シ、健康診断ヲ行フ。又待合室ヲ廣大、明トシ患者ニハ咳嗽訓練ヲ行ヒ痰壺携帶ヲ行ハシメ對座ニハ相當距テシメ待合室ニハ多數居ラザラシメ清潔法ノ勵行ヲナス。又救護婦ノ豫防ニハ其控室ヘ患者ヲ入レザラシメル様ニス。訪問シタル時ハ患者等ニ咳嗽「マスク」ヲ當シメ醫師ハ診察ノ際咳嗽ケラレザル様注意スベシ。診察ノ時ハ「リントン」又ハ綿紗ニテ簡單ニ口ヲ掩ハシム。結核患者ノ診察ハ常ニ特定ノ室ニ於テ行ヒモシ其設ナキ時ハ乳兒救護ヲ共同ニ行フ場合ニハ結核患者ノ後ニ乳兒ヲ入レザルコト。尙適當ナル Sterap 裝置ヲ説示ス。

之ニ對シテ Nagelschmidt, Flatzek, Paetsch, Petruschky, Geisler, Czarniecki, Ritter, Brauning, Mohr, Neufeld 等ノ追加討論アリタリ。(寺尾抄)

### 29、救護所ヲ通ジテ結核患者ヲ發見指導セヨ

H. Bausch.

現在獨逸ニハ人口八百萬卽割合ヨリ推シテ一萬六千人ノ開放結核患者ガ指導啓發サレテ居ナイ。全國ノ千四百九十二救護所中X線裝備ヲナセルモノハ四百九所ニ過ギナイ。又救護所總體カラ見ルニ全ク統一シテ居ナイ。然シ發見サレ指導サル、開放結核患者數ハ増加シタ。又科學的進歩ニヨリ健康相談所ガ合理的ニ施行サレ而モ是等ハ結核相談所ニ頗ル類似シテ來タ。刻下ノ急務ハ結核救護ト保健施設トノ合同組織化ヲ必要トシ「レントゲン」或ハ「ビルケー」反應ヲ參考トシテ徹底的ニ患者ヲ搜索シ速ニ發見指導スルコトガ肝要デアアル。

之ニ對シテ Paetsch, Ritter, Neufeld, Geisler, Petruschky, Brauning 等ノ討論追加アリ。(寺尾抄)

### 獨逸結核救護醫師會及肺療院協會聯合會報告

一九二九年五月二十五日 Bad Pyrmont ニ於テ

### 30、體內肺癆再感染ニ就テ

Anders.

老人ニ起ル老人肺癆及粟粒結核ハ其初感染ノ淋巴腺系統ノ急性炎衝(コロン)內的淋巴腺性再感染)ノ爲ニ初感染期ノ體內遲期轉移トシテ考ヘラル、事ヲ報ジ且フライブルグ病理研究所ノ剖檢例ニヨリ肺ノ體內肺癆性再感染ニ轉ジテ之ハ今日迄知ラレタルヨリモ理論的ニハ更ニ多キ現象デアラチバナラヌト云フ。尙又四十五歳以上ノ人ニハ肺炎肺癆再感染ハ殊ニ稀ノ様ニ見エル。否寧ロ肺一圓ニ散布サレ殊ニ下半部ニ或ハ肋膜下淋巴腺ニ限局シテ極ク小ナル時々菌ヲ保有セル硝子様癍痕組織ニテ包囊サレタル乾酪竈トシテ見ラレ夫ガ石灰化セル場合ト否ラザル場合トアリ。同一人ニシテ組織學的像ニテハ種々ノ類ノ癆再感染ヲ見ルコト屢クナリ。カクノ如キハ時間的ニ相次テ起レル體內再感染ヲ物語レルモノナリ。又演者ハ老人ノ癆再感染ノコノ種ノ型ヲ示セル體內發生ヲ特異性肺癆性病竈形成及局所肺細葉ニ於ケル治癒期ノナキニヨルト見ル。コノ癆竈ガ長ク存在スレバ石灰沈著ヲ來シテ「レントゲン」學者ノ肺内血流量發生竈トシテ考ヘラレタ像ヲ呈スル。老人ニ於ケル是等ノ竈ハ固有ノ肺組織内ニハナクシテ肋膜ニ直接シテ不規律ニ排列セル肋膜下淋巴腺中ニ存スルモノデアアル。老人ノ是等ノ再感染ハ良性型ノ如ク見エルガ理論的ニハコノ竈ハ再び活動性トナリ從ツテ肋膜下竈カラ起ル肺癆ノ原因トナリ得

ルモノニシテ(讀者ハ其例ニ未過)所謂早期浸潤ト同像トシテ現ハレルモノナリ。要之肺勞性再感染ノ時相ハ互ニ異リ相次テ來ル二種ノ時間的規則の時相ガアル。四十五歳頃ニナルト若年時代ノ體外再感染ニ次テ第二體內再感染ガ初マル。老人ニ見ル臟器結核ト同様ニ肺ノコノ遲發再感染モ亦初感染時相ノ遲發症狀ト見ルベキ事ヲ云ビ得ル。

之ニ對シテ次ノ如キ討論ガアル。

Ziegler 病竈周圍ニハ淋巴管ガ腫レソレガ肋膜ノ方向ハ後退的ニ擴ガツテ行ク。早期浸潤ノ中央ニ極小結節ヲ屢ク見ルガ之ハ Anders 說ニ一致シテ居ヌ。

Petruschky 肺中ノ末梢部ニ在ル小病竈ハ淋巴腺竈テアルコトハ事實ダ。

Redeker 「レントゲン」透視ニヨルシモン型孤立小斑影ハ肋膜下淋巴腺竈ト關係アリトハ信セラレナイ。

Schroeder 中隔竈ヨリ起リ中隔肋膜淋巴道ニ新竈ヲ生ジ得ル。之ハ Anders ノ說ニ一致スル。

Hübshmann カクノ如キ肋膜下淋巴腺ガ血流性感染ヲ受ケタ所テハ肺内血  
流性轉移ガ起ラナケレバナラナイ 余自身ハカクノ如キ肋膜下竈ヲ非常ニ所  
屬初期群ト考ヘル。

Brauer 動物肺ニヨリコノ問題ハ十分ニ研究テキル  
Stefen 初期群ガ治癒シタル時ハカクノ如キ像アリ。

Anders カクノ如キ竈ハ新舊ノ別ナク包囊サレテアル。若年デモ見ルガ多ク  
ハ四十五歳以後ノモノテアル。Hübshmann トハ反對ニ余ハコノ報告ハ既ニ  
議論ノ餘地ナキモノト考ヘル。同時ニ又初期浸潤ノ混合問題ナリト考ヘル。  
然シ肋膜下小竈ハ初期群形成ノ結果トシテ起リ得ルト云フ Hübshmann ノ

說ハ正シイ。然ツ又是等ノ多クガ全ク異リタル肺部位中ニ存スル事ハ初期群ト無關係ニ有リ得ル。病理學者ハ後退的ニ淋巴道ニ蔓延スルト云フコトヲ信  
ジナイ。(寺尾抄)

### 31、肺ノ兩側安靜法

Frischbier.

一側ニ氣胸ヲ初メテ施行シタルノハ C. Forlani ヲ兩側ヲ同時ニ行ツタノハ  
Ascoli ニ依ツテ創メラレタ。兩側肺ヲ同時ニ安靜セシメルニハ次ノ事項ガ  
アル。

- (一) 追加的兩側氣胸術。(二) 同時的兩側氣胸術。
- (三) 一側氣胸他側橫膈膜神經擦除法。
- (四) 兩側橫膈膜神經擦除法。
- (五) 一側胸廓形成術他側氣胸術。
- (六) 一側充填術他側氣胸術。

右ニ就キ說述シタル後次ノ如キ結論ヲ述ブ。

- 一、兩側肺安靜ニ就テ操作法ハ月淺キタメ統計少ク從テ其優劣ハ未決ナリ。
- 二、慎重ニ選擇セバ兩側虛脫療法特ニ同時兩側氣胸ハ好結果ヲ得ラル。救フ  
ニ途ナキ者モ著シク良好トナリ或ハ臨牀的治癒ヲ期待シ得。
- 三、追加的兩側氣胸術ヲ注目スベキナレド同時性兩側氣胸術ニ比シテ適應例  
ハヨリ稀ナリ。
- 四、モシ一側ニ癒著アリテ兩側同時氣胸ガ不可能ノ場合ニハ一側氣胸ニ他側  
橫膈膜神經擦除ヲ問題トスベク、此際ニハ其效ヲ期シ得ラルベシ。
- 五、兩側性橫膈膜神經擦除或ハ切斷ハ兩側ガ恢復ノ見込ナキモノニハ本法施  
術ヲ控ヘル。



六、氣胸ハ必要ニ應ジテ隨時施行シ得ルヲ以テ他側ニナルタケ早期ニ胸廓形成術並ニ氣胸施行ヲナストヲ推奨スル。

七、一側ニ氣胸術ヲ施シ他側ニ充填ヲ行フ事ハ事情ニヨリテハ考慮ニ入レルベキテアル。

之ニ對シテ多數ノ經驗アル意見ガ出タガ兩側氣胸ハ未ダ一致シタ意見ガナイ。一部ハ同時性施行及後充滿ヲ唱ヘ他ノ人々々々ニ Liebenmeister ハ六六例ニ就テ行ツタ結果交互施行及充滿ヲ稱シ繼續的ニ肺活量ヲ觀察セヨト云ビ、之ニ對シテ Brauer ハ Spirographie ヲ使ヘト云フ。 Freund ハ「テクニク」ヲモット研究シ臨牀經驗ヲ蒐メテ適應症ヲ定メルノガ大切デアラウト云フ。 Hamus 及 Simon ハ兩側性虛脫療法ハ一側性ノモノヨリモ合併症ヲ起スコト屢クナリト云ビ、 Brauer ハ兩側性橫隔膜神經擦除ニ對シテハ徹底的ニ警告ヲ發シタ。

### 32、肺結核ノ充填療法

Alexander.

手術法ハ肺ノ肋膜外剝離ニヨリ限局部位ニ空隙ヲ作りテ之ニ「バラフィン」ヲ充填スル事ニシテ之ニ二ツノ條件アリ。一ハ十分ニ剝離スルコト他ハ當該肺臟部ノ十分ニ虛脱ヲ來スコトナリ。充填ニハ強固ナル胸膜癒着ノ存在及胸壁ノ硬強ヲ必要トスル。即根本的ニ氣胸橫隔膜神經切除及ビ胸廓形成術トハ相異シテ居ル。而シテ充填ニハ追加的收縮ハ餘リ重要アハナイ。合併症トシテ起ル中隔ヘノ過壓、剝離ノ際ノ空洞破裂、又ハ壓ニヨル潰瘍、充填滲出液、主氣管枝ノ狹窄等ヲ注意スベキテアル。限局シタ強ク收縮シタ機構殊ニ限界サレタ空洞 (Baer ノ理想的適應症)ノ場合ニハ比較的危險ナキ手術ガテキル。又胸廓形成ノ後ニ限局シタル空洞遺残ヲ壓迫スルタメニ充填ハ著效ヲ有シテ

居ル、更ニ又充填ハ廣範ナル肺結核ノ場合ニ少クトモ大ナル空洞ノ形ヲシテ居ル主病竈ヲ治癒セシメルニハ問題トナル。又癒着ノタメニ氣胸ガ不可能ナル場合ニ横隔膜神經擦除ガ不十分テ又他側ノタメニ胸廓形成ガ不可能ニ見エタ場合ニ施行シ得ル。コノ場合ニハ勿論良好ニ向フコトヲ期シ得ルノミデア。横隔膜切除及充填法ハ著明ナ器械的影響ヲ及ボスガ結核性硬壁空洞ニ對シテハ多クハ適當ナ影響ヲ及ボシ得ナイ。 Baer 氏手術ハ胸廓形成ヲ補充スル意味ニ於テ發達スルデアラウ。

之ニ對シテ Stark ハ Ziegler が肋骨切除ヲ行ハズシテナス手術法ヲ述ブ。其主目的ハ空洞壁ノ緊張ヲ目差スルモノデアアル。又過大ノ充填ヲ不可トシ前年ノ下半年期ニ行フタ二十六例ニ就テ説明スルトコロアリ。

### 33、肺結核者腎臟ノ機能的鑑定

Deist.

活動性ノ腎臟外結核ニ於テハ一般ニ腎臟ハ其結核ニ與ルモノデアツテ之ニハ尿ノ病的變化ヲ伴ハズニ機能障害ノミヲ起ス程度ヨリ結核菌排泄ヲ伴フ重症結核性腎炎マデアアル。即固有ノ腎臟結核ト前記ノ變化トノ間ノ關係或ハ移行型ノ有無ヲ組織學的ニ研究セバ本問題ノ解決ニ近ヅクデアラウ。(寺尾抄)

### 34、結核症及ビ低血壓症

Junker.

低血壓症ハ肺結核ノ診斷ヨリモ豫後ニ重大デアアル。猶所謂體質性低血壓症ト肺結核トノ類症鑑別ガ必要デアツテ從來兩者ガ混合シテ考ヘラレテ居タノガ多い。

### 獨逸結核救護醫師會

一九二九年五月二十五日

(寺尾抄)

## 住居外結核感染問題

### 35、大都市ニ於ケル理論的基礎及確認

Kreuser.

近時ノ研究ニヨリ結核罹病ハ曝露ノミナラズ要因が重大ナリト考ヘラル、ニ至ツタ、從ツテ其家族内感染ハ他ノ傳染病トハ異リ幼児ヨリ成人ニ又成人ヨリ幼児ニ感染スル場合が多いノデアアル。又結核ノ感染ト罹病トハ成人ニ於テハ時間的ニハ全ク別ナ點ニアルノテ屢々重感染トシテ家庭外感染カラ起ル事モアルノテ高年ニナルニツレテ其關係ハ益々不明瞭ニナツテ來ルモノデア

ル。結核感染ノ起リ方ヲ見ルニ若年者ノ關係ハ次ノ如クデアアル。即家族内對家族外對感染路不明ハ六〇對三四對六ナリ。之ヲ成人間ノ結核罹病表ニ見ルニ四八對一七對三五トナツテ居ル、即家族外感染ノ全列ハ總結核罹病ノ三〇乃至四〇%トナル解デアアル。

次ニ家族外感染路ヲ考ヘルニ幼児及發情期ノ者ヲ十分ニ觀察シタルトコロニヨレバ石炭山ニ於テハ感染ナク熔鑛所ニ於テモ極メテ稀デアアル。是等ノ工場ノ寢所ハ非衛生的デアアルニ拘ハラズ同様ニ少イ。觀察資料ハ狹隘密集住居ノ兒童ノ感染源間ノ交際及ビ結核ニ接シタ機會ナイ兒童ヨリ得ラレタモノデアアル。大多數ハ一度モ同居シナイが互ニ訪問シタリ又ハ友人關係等ニヨリ人ヨリ人ニ傳染シタリト見ルベキモノが多い。職業ニ就テ見ルニ文獻ニ表ハレタルモノハ敎職又ハ看護ニ與ハル者ニ多イトサレテ居ルが Kreuser 氏ノ觀察テハ若年者ニハ小工場又ハ事務室が大ナル關係ガアル。形務所又ハ精神病院ニ於テ感染スルモノハナイ。又結核菌含有乳ノ飲用ガ中々重大デアアル。

## 抄 録

家族外感染ノ影響ヲ研究スルニハ體質條件ヲ確立スルト共ニ感染源ト想像サル、モノヲ把握スル事ニ對シテヨリ其基礎ヲ作ルベキデアアル。家族外要諦トシテハ公衆衛生ヲ向上セシメ尙又患者及菌略出者ヲ取締リ他方保健的生活法等ヲ更ニ考究スベキデアアル。

(寺尾抄)

### 36、田舎ニ於ケル確認

Kalle.

Gumbinnen 縣ノ三隣接地學校ニ於テ施行シタトコロニヨレバ田舎テ小兒ノ感染源ヲ科學的立場カラ確認スルコトハサホド困難デハナイ。著シイ肺所見ヲ有スル小兒カラ感染ノ行ハレル事ハ多ク、從ツテコノ感染路ガ住居内デアルト殆ンド同様ノ重大サヲ有シテ居ル。又家族内ト同様ニ結核敎師ヨリ傳染スルコトモ重大視セテバナラス。反之物質ニヨル感染ハ小兒アモ成人アモ甚ダ少イ。尙又家族交際問題テ、患者又ハ職業上ノ同僚カラ感染スルコトハ極少イ。

之ニ對シテ Aschenheim ハ二八六例ヲ引キ素質ハ輕視スベキデアナイ。家族外傳染ハ親屬傳染ニ勝レテ居リ傳染源不明ノモノハ恐クハ家族外傳染ト同ジデアラウ。又家族外傳染ハ恐クハ家族内傳染ヨリハ不良デアラウ。實地救護事業ニトツテハ傳染經路ヨリモ寧ロ重症ノ程度ガ意味ガアル。又素質ヤ比較免疫ガ重大デアアル云々ト。

Köster ハ人口一一五〇ノ村テ短期間ニ五人ガ結核性腦膜炎テ死ンダ事ヲ報シ、小兒ニ對シテハ家族外傳染源ト親密ナル接觸ヲスル時ニ結核性腦膜炎ガ短期間ニ起リ得ルト云フ。

其他 Berger, Falzack ノ追加討論アリ。

(寺尾抄)

## 37、學生ノ開放結核及未婚者結核補遺

Kaiser-Petersen.

獨逸ノ一高等學校中、學生ノ健康診斷ニ就テ責任ヲ以テ行ツテ居ルノハ二五校ニ過ギナイ。學生ノ結核ヲ初期ニ發見シテ適當ニ療養セシメルコトハ國家トシテモ重大問題デアアル。次ニ未婚者ニ對シテ救護ノ手ヲ伸スコトハソレ自體大ナル困難ガアル。ソレハ訪問シテモ拒絕サレル爲デアアル。

之ニ對シテ Engelmann, Petruschky, Loch-Kämper ノ追加アリ。結局「レントゲン」裝置ヲ設ケテ學生ノ結核ヲ早期ニ診斷シテ救護機關ノ手ニ收メルコトガ今後ノ注意スベキ事業デアアルコトニ結論ガ到達シタ。(寺尾抄)

## The American Review of Tuberculosis

Vol. XX No. 6, 1929.

## 38、實驗的塵芥肺ノ研究

Leroy a. Gardner.

著者等ハ石英粉、花崗岩粉、硅石粉等ヲ吸入セシメ、肺中ノ治療セル初感病竈ノ再活動モ研究シタ。

先ヅ毒力ノ弱イ結核菌ヲ吸入セシメテ海狸ヲ感染セシムル時ハ、普通肺肋膜下ニ孤立性ノ結節ヲ生ズ、此ノモノハ乾酪化シ後退行變性ヲ起シ、最後ニ溶解ニヨツテ停止性トナル、氣管、氣管枝淋巴腺モ同様ナ變化ヲ蒙リ、同様ナ經過ヲトル。カクシテ感染セシメタル後、五十四乃至二百〇六日、稀レニ、四百日シテ動物ヲ四群ニ分チ、其中三群ハ死亡スルカ又ハ殺戮セラルマデ、石英粉、硅砂粉、花崗岩粉ノ充チタル部屋ノ中ニ入レ、是等ノ塵芥ヲ吸入セシメタ。

カ、ル實驗ニヨルト屢々擴汎ナ慢性潰瘍性結核ヲ起スカラ、治療セル結節中ニ存在セル菌ノ新ラタナル増殖ヲ促ステアロウトイフコトガ考ヘラレル。乾酪性肺炎ノ場合ハ特別デアアルガ、上記ノ變化ハ人ニ於テモ遭遇スルヤウニ思ヘル。

而シテ初發病竈ニ影響ヲ及ボスノハ、少ナクモ二ヶ月夫レ以上塵芥ノ部屋ノ中ニ曝露セチバナラナイ、初發結節ノ再活動ハ二百〇六日時トシテ四百日以後ニ起ツタ。

石英粉デハ動物ノ七三・六%、硅砂粉デハ三一・八%、花崗岩粉デハ唯二一・三%ガ進行性ノ結核ヲ示シタ、此ノ結果ハ塵芥ノ種類ニヨリコトナルモノデ、大理石、及軟炭粉ハカ、ル菌ノ増殖ヲ促サナカツタ、即此ノ反應ハ特定塵芥ノ吸入ニヨル、特異ナル結果ノヤウニ思ハレル。

此ノ結果ニ對シテ、一部分ハ唯塵芥ノ大量ガ含マル、結節ノミニ、起ルコトニヨリ多少説明セラレル、塵芥吸入ガ始マルト、塵芥片ハ食細胞ニヨリ結節中ニ搬入セラレル、石英粉ニ於テハ比較的少量デモスベテノ食細胞ニトラレ、是等ノ細胞ノ活動性ハ侵サレズ、反ツテ鼓舞セラレル、然ルニ一方硅砂粉、花崗岩粉ハ運動ノ力ヲ失ツタ細胞ノ大多數ニ取ラレ、少量ノ塵芥ノミガ結節中ニ運ビ込マレル、吸引セル塵芥片ト、結核菌トノ間ノ反應ノ本態ノ說明ハ議論ガマチノダガ、上記ノ實驗ハ人ノ塵芥肺ニモ同様ノ變化ガアルモノト考ヘラレル、此ノ條件ヲ具備スルスベテノ結核ハ、必ズシモ工業的外來傳染ヲ必要トシナイトイフコトハ信セラレル、而シテ或ル程度迄ハ固有型ノ塵芥吸入ハ、既ニ停止セル病竈ヲ再燃セシムルコトハ確カラシイ。(浦谷抄)

## 39、肺結核患者ニ於ケル指爪變化ノ研究

Albert G. Hahn.

指爪ノ陥没(Pitting)ハ活動性肺結核患者ノ一〇〇%ニ見ラレ、比較的短期間非活動性ニ経過スル患者ニ於テハ六%ニ之レヲ見ラレタ、一乃至二五年間活動性症狀ヲ示サナカッタ非活動性結核ニ於テハ、著者ノ觀察ニヨレバ一〇〇%ニ陰性デアツタ、夫レ故ニ既ニ知ラレタル肺結核患者ニ於テ、此ノ變化ガ現ハレ、他ノ疾患ガ存在セナイナラバ、最近ニ結核ガ活動性ニナツタト云フコトガ認めラレテバナラン。

ヒポクラテスノ屈曲(Hippocratic Incubation)ハ活動性結核ノ七六%、非活動性結核ノ五〇%、及療養所ニ於ケル所員ノ三〇%ニ陽性デアツタ、此ノ變化ハ非結核(健康者ト假定セラル)ノ對稱ニ於テハ起ラナカッタ。

指爪ノ「チアノーゼ」ハ、活動性結核ノ六六%、非活動性又ハ慢性患者ノ二%ニ於テ陽性デアツタ、此ノ變化ハ臨牀症狀及X線検査ガ證明スル如ク、速カニ進行スルスペテノ場合ニヨク認めラレタ、此ノ觀察カラ「チアノーゼ」ハ豫後推定ニ價值ガアルヤウニ思ハレル、爪溝(Triting)ハ上記ノ變化ヨリモ不明瞭テ價值ガ少ナイ。

#### 40、肺結核の發病ヨリ死亡ニ至ル年數

Harry Lee Barnes and Lena R. P. Barnes

肺結核患者ノ平均生存期間ハ一五六七人ノ女ニ就イテハ三七・九三ヶ月、九七〇人ノ男子ニ就イテハ三四・八一ヶ月、而シテ二五三七人ノ患者ノ平均生存期間ハ三六・七二ヶ月デアツタ。

二四二四人ノ白人患者ニ於イテハ三七・八一ヶ月、一一一人ノ黑人種ニ於イテハ一九・五九ヶ月、二人ノ黄色人種ニ於イテハ四四・五〇ヶ月デアツタ。療養所入所中モ入所前モ咯血ガアツタ千二十六人ノ患者ハ四三・三七ヶ月生存シ、死亡迄咯血ガナカッタカ、又ハ療養所生活ヲシナカッタ患者一四九六人

ハ三二・二九ヶ月間生存シタ、咯血ガアツタカナカッタカ分ラナイ一五人ノ患者ハ二六・〇六ヶ月生存シタ、滲出性肋膜炎ノ患者五一人ノ平均生存期間ハ、モシ發病ヲ肋膜炎ノ發病ノ時カラ數ヘルナラバ五一ヶ月デアツタ、十二人ノ肋膜炎患者ニ於テ、肺症狀ノ發現スル迄健康ニ見ヘタ期間ハ六一ヶ月デアツタ、上記ノ五一例ニ於テ、連續セル肺症狀ノ發現時ヨリ數ヘラレルナラバ平均三七ヶ月デアアル。生存期間ガ年齢、咯痰ノ菌ノ多少、生存期間ノ長短ニヨリ分類セラレルナラバ次表ノヤウデアアル。

I 表  
年齢

歳	例 數	平均生存月數
15以下	53	41.66
15—20	366	29.15
20—30	953	33.79
30—40	630	40.03
40—50	373	43.23
50—60	131	42.09
60—70	29	41.59
70—80	2	23.50
80以上	000	00.00
總 計	2537	36.73

II 表  
結核菌

咯 痰	例 數	平均生存月數
常ニ陽性	1430	30.65
多クハ陽性	454	41.28

III 表  
期間

生存期間	例 數	%
3ヶ月以下	20	0.788
3—6ヶ月	143	5.636
6—12ヶ月	460	18.131
1—2年	696	27.433
2—3年	395	15.569
3—5年	365	14.387
5—10年	332	13.089
10—15年	91	3.586
15—20年	23	0.906
20年以上	12	0.473
平均生存期間 36.73ヶ月	2537	

#### 41、肺結核ニ對スル副甲状腺「エキス」及「カルシウム」ノ石灰變性及治療作用

Burgess Gordon and A. Cantarow

(一)、一乃至四ヶ月間甲状腺「エキス」ヲ一日二回一〇單位宛ヲ服用セシメタ結核患者ノX線検査ハ、咯血、肋膜炎症状、咳嗽、咯痰等ノ症状ヲ度外視スル時ハ、疾病ノ經過ニ就テハ、特有ナル變化ヲ認メルコトハ出來ナイ、且肺中ニ於ケル石灰ノ減少、又ハ増加セル沈著等ハ證明サレナカッタ。(二)、一四人ノ肺結核患者ニ副甲状腺「エキス」、(四八時間毎ニ二〇單位)及乳酸「カルチウム」(一日三回三〇「グレン」宛)ヲ一乃至八ヶ月間服用セシメタルニ、第一ノ場合ト同様ナ成績デアツタ、X線検査ハ肺竝ニ手趾骨ノ石灰沈著ヲ示サズ、血管ヲ認ムルコトハ出來ナカッタ。

三、罹患セル結核組織、又ハ疑ハシキ組織ハ、直接ニ血液中ノ過剰石灰ニヨリ影響セラレズ、又石灰變性ヲ起サシムル目的ノモトニ、副甲状腺「ホルモン」及「カルチウム」ノ服用ハ意味ガナイヤウニ思ヘル。而シテ是等ノ物質ガ疾病ノ經過中ニ起ル或ル症状ニ對スル影響ハ治療上價値ガアルヤウダ。

(浦谷抄)

#### 42、健康海猿ノ血液ニ對スル「グリセリン」及

舊「ツベルクリン」作用竝ニ夫レト生結核

菌接種前後ノ海猿ニ對スル少量ノ「ツベ

ルクリン」作用トノ比較

Enda H. Tompkins

(一)、舊「ツベルクリン」ヲ二疋以上健康海猿ノ腹腔内ニ注射スレバ海猿ハ死

亡セリ。

二、濃厚ナル「グリセリン」注射ハ海猿ヲ死ニ致ス。

(三)、致死量以下ノ舊「ツベルクリン」、又ハ致死量以下ノ「グリセリン」ヲ繰返ヘシ健康海猿ニ注射スル時ハ、一定ノ恒久性的變化ヲ起サナイ。

(四)、致死量以下ノ舊「ツベルクリン」ヲ繰返ヘシ健康海猿ノ腹腔内ニ注射スル時ハ、注射毎ニ血液中ノ白血球、單核細胞ノ増加、淋巴球ノ減少ガ起ル、「エオジン」嗜好細胞ハ最初ハ減少スルモ、終リニ至レバ注射後増加ヲ示ス、淋巴球ハ注射後ハ減少スルモ其ノ後次第ニ増加ヲ示ス。

(五)、舊「ツベルクリン」注射ニ用ヒタルヨリモ多量カ、又同量ノ「グリセリン」ヲ健康海猿ノ腹腔内ニ繰返ヘシ注射スル時ハ、各注射ゴトニ血液中ノ白血球、單核細胞ノ増加ガ起ルモ、淋巴球、「エオジン」嗜好細胞ハ、注射直後ニ於テモ其ノ後モ影響セラレナイ。

(六)、舊「ツベルクリン」ノ少量ヲ繰返ヘシ海猿ニ注射スル時ハ、結核菌接種前ノ動物ハ何等生命ノ危害ヲ示サズ、又結核動物ニ見ル如キ組織、及血液ノ變化ヲ認メナイ。

(七)、結核菌接種後、舊「ツベルクリン」ノ少量ヲ繰返ヘシ海猿ニ注射スル時、海猿ノ生存期間ハ延長セラレ、感染ニヨリ起ル血液變化ヲ妨グル。(浦谷抄)

#### 43、肺結核患者血中「カルチウム」ノ觀察

Vera B. Dolgopoi

(一)、中等度ニ進行セル肺結核患者ノ血液中「カルチウム」含量ハ一般ニ増加ヲ示ス。

(二)、著シク進行セル肺結核ニ於テ FAC(Far-Advanced C form)ノ型ハ普

適合量ヨリモ平均「カルチウム」含量ガ少ナイ。FAA型 (Far-Advanced A Form) 及 FAB型 (Far-Advanced B Form) ハ石炭含量ノ減弱ヲ示サナイ。

(三) FAC型ニ於ケル石炭含量ノ減弱ハ營養不良ノ結果デアル。

(四) 中等度ニ進行セル肺結核ニ於テ、血清中石炭含量ノ著シキ増加ハ、二

一乃至四〇歳ノ者ニ認メラレ、増加ノ最モ少ナイモノハ四〇歳以上ノモノニ

認メラレル、著シク進行セル肺結核テハ四〇歳以上ノモノガ最モ高イ石炭含

量ヲ示ス。

(五) 石炭含量ガ一〇(〇) 珉中九二珉以下ニ低下スレバ死ノ切迫セルコトヲ示ス。

(浦谷抄)

#### 44、Hansler (支那産ノ鼠)ノ結核菌感受性

George Y. C. Lu

Hansler ハ結核菌ノ少量ニ對シテモ感受性が強く、一〇乃至一五箇ノ結核菌ニヨリ、殆ンド八〇%ガ感染スル、殆ンド五〇%ハ一乃至二箇ノ結核菌接種ニヨリ結核變化ヲ起ス、僅カノ結核菌接種後、結核感染ノ最初ノ發現ハ、接種後約四週目ニ分ル、結核菌接種前ニ Hansler ラX線ニ曝露スルモ、結核變化ガ發現スル迄ニ經過スル期間ヲ短縮スルコトハ出來ナイ。(浦谷抄)

#### The American Review of Tuberculosis

Vol. XXI No. 1, 1930

#### 45、原發性肺臟癌

James Alexander Miller and Oswald R. Jones.

著者ハ原發性肺臟癌ニ關スル一九一一年以來ノ多數ノ文獻ヲ引用シテ綜説的記述ヲナシ更ニ自ら得タル症例三十二ヲ追加報告セリ。(柴田抄)

#### 46、肺臟ノ腫瘍

William C. von Glahn.

肺臟ノ腫瘍殊ニ癌ニ就キテ綜説ス。(柴田抄)

#### 47、胸腔内腫瘍ノレントゲン療法

William A. Evans and T. Leucutia.

原發性及ビ二次性胸腔腫瘍ノ治療法トシテレントゲン療法ハ最モ有效ナルモノ、一ナリ。該療法ハ病的組織ヲ崩壞セシムルモ健康組織ヲ害セザルヲ以テソノ要綱トス。腫瘍ノ種類ニヨリソノ細胞ノ放射線感受性ニ強弱アリ從ツテレントゲン照射ニ對スル腫瘍ノ反應ニ差異アルガ故ニ鑑別診斷ニモ亦應用セラル。惡性腫瘍ニ對シ鉛「コロイド」ノ靜脈注射ヲ行フハ現今ノ療法ニテソノ效果ヲ決スルハ尙早ナルガ、之レントゲン療法ト併用ハ研究ノ價値アリ。(柴田抄)

#### 48、實驗的結核ニ及ボス尙儀性食餌ノ影響

#### III 肝油ノ添加ニヨル結核抵抗力ノ減少

Arnes H. Grant

著者ハ糞ニ白鼠ノ結核ノ進行ニ及ボス「ビタミン」D不足ノ影響ニ就キテ報告シタル際ニ「ビタミン」Dヲ與フレバ必ズシモ總テノ場合ニ結核ニ對スル抵抗力ヲ増進スルモノニ非ザルヲ暗示シタリ。其後肝油ノ結核治療上ノ效果ニ關シ研究シタル所ニヨレバ、普通食餌ニ「ビタミン」D(肝油)ヲ追加スル時ハ結核ニ對シ抵抗力増加スルモ、從來「ビタミン」Dノ著シク不足セル食餌ヲ與ヘタル動物ニ肝油ヲ添加シテ與フル時ハ急劇ニ抵抗力低下スルヲ認メタリ。又「カルシウム」及ビ「ビタミン」D缺乏食ヲ與ヘ來レルモノニ「カルシ

ウム」ヲ追加スルモ肺結核ノ進行ヲ抑止スル事能ハザリシト。(柴田抄)

#### 49、實驗的結核ニ及ボス佯性食餌ノ影響

IV「カルシウム」「ヴィタミン」C「ヴィタミ

ン」D間ノ最適率ヲ亂ス事ニヨリテ起ル

影響

Agnes H. Grant.

食餌ニ含有サル、「カルシウム」「ヴィタミン」C、「ヴィタミン」Dノ三者間ニ必然的ニ存在スベキ平衡状態ヲ長時間ニ互リテ破ル時ハ白鼠ノ生長力ヲ妨グル事ナキモ結核ニ對スル抵抗力ヲ減弱セシム。「カルシウム」ノ缺乏量又ハ通常量ヲ與ヘツ、「ヴィタミン」Cノ過剰ヲ長ク續ケル時ハ肺結核蔓延ヲ促進ス、感染ト同時ニ食餌中ノ「ヴィタミン」Dヲ除外シテ「ヴィタミン」Cニ換エルカ又ハ「ヴィタミン」Dヲ缺如セル食餌ニ「ヴィタミン」Cヲ加フル時ハ肺臟ノ結核ヲ増悪セシム。之レニ反シ「ヴィタミン」D含有食餌ニ「ヴィタミン」Cヲ加フル時ハ食餌ハ矯正セラレ結核ニ對スル抵抗ハ高マル。白鼠ニ於テ感染後ノ結核蔓延ヲ阻止スルニ足ル食餌補正ノ程度ハ感染以前ニ與ヘ來レル食餌中要素ノ缺乏或ハ過剰ノ如何竝ニソノ食餌ノ繼續時間ニ關係ス。(柴田抄)

#### 50、移植皮膚ニ於ケル組織結核「アレルギー」

ノ研究

A. H. W. Caulfeild M. H. Brown and William Magner.

著者ハ弱毒結核菌ヲ以テ免疫シタル「モルモット」及ビ對照健康「モルモット」ノ皮膚ノ切片ヲ他ノ「モルモット」ニ移植シ、之レニ強毒結核菌、及ビ「ツベルクリン」ヲ注射シ其所ニ惹起セラレタル反應ヲ試験セリ。ソノ結果ニヨレバ免

疫植皮ト健康植皮トニテハ結核菌注射ニテ起ル反應ニ每常明瞭ナル差異アリ、「ツベルクリン」ニテハ程度弱キモ同様ナリ。免疫植皮ニ常ニ起リタル反應ハ健康皮膚ニ起ルモノヨリモ免疫「モルモット」ノ皮膚ニ起ルモノニ類似ス、ソノ要項ヲ擧グレバ、免疫「モルモット」ノ皮膚ヲ移植シタル部分ニ注射シタル結核菌ハ移動少ナク淋巴道ニヨル傳播ガ遲延スル事免疫動物ニ見ラル、所ノ如シ。二、免疫植皮内ニ菌ヲ注射シテ起ル反應ハ比較的急且強度ナル點ハ健康皮膚又ハ健康植皮ニ起ルモノヨリモ免疫動物ノ皮膚ニ起ルモノニ近似セリ。三、免疫植皮ニ於ケル「ツベルクリン」過敏性ノ存在モ亦證明セラレ、即チ肉眼の膨隆及ビ顯微鏡的浸潤ヲ生ズ、但シ免疫植皮ト健康植皮トノ間ノ差異ハ結核菌ニヨル反應ノ如ク「コンスタント」ニアラズ尙程度ニ於テモ明瞭ヲ缺グト。(柴田抄)

#### 51、Caulfeild 氏ノ抑止反應(Inhibitive reaction)

A. C. Norwich M. F. Mac Lennan and

M. F. Basingthwaite.

著者等ハ Perla 氏が嘗テ本誌上ニ Caulfeild 氏ノ抑止反應ヲ否定スルニ論文ヲ掲載シタルニ對シ Perla 氏ノ用ビタル「アンチゲン」及ビ反應術式ガ Caulfeild 氏ノ原法ト異ナレルヲ指摘シ、該反應ハ結核血清ニ對シ特殊性ヲ有シ時トシテ診斷ニ又特ニ豫後判定ニ有力ナル補助法ナリト結論ス。(柴田抄)

#### 52、早期結核ニ關スル考察

Miles J. Breuer.

結核ノ早期診断ハ必ズシモ困難ナラザレドモ之レヲ早期ニ於テ患者又ハ家族ニ知ラセ納得シテ治療ヲ受ケシムルハ最も難事ナリ、而モ敢テコノ難事ヲ行フノ勇氣ト誠意トヲ具フル醫家ノ少數ナルハ概嘆ニ値ス。結核ニ關スル一般

的理解ハ近時廣マリタルノ觀アレドモ個人トシテ個々ノ場合ニ直面スル時ヨク結核恐怖觀念ヲ脱却シ得ルハ稀レナリ。對結核戰ニハ「ノ」ヲ見テ打破スル事第一ノ要件ニシテ又當ニ醫家ノ責務ナリ。

### 結核専門外雜誌

#### 53、犢ニ於ケルBCG培養ノ豫防接種ノ效果ニ就イテ

Prof. N. W. Korschun u. Dr. P. P. Dwijskoff  
(Zeitschr. f. Immunitätsforsch. Bd. 61 H. 1/1)

犢六頭ヲ用ヒ内二頭ハ經口的ニ二頭ハ皮下ニBCGノ接種ヲ行ヒ残り二頭ハ之レガ對照トシテ使用シ一定期間ヲ經テ強力牛型生菌ヲ注射シ後は等屍體ヲ檢シBCGノ效果ヲ檢セリ。

BCGヲ豫防接種ヲ行ヘル犢ニ於テ之レガ對照ト屍檢成績ハ殆ンド變リナク、BCGノ接種ニヨリテ強力結核菌感染ニヨル結核發生ヲ豫防シ得ズ僅カニ良好ナル影響ヲ與フルト云フニ過ギズ。

#### 54、ペトロフ氏ノBCG株ノ分裂ニ就イテ

Prof. R. Kraus.

(Z. f. Immunitätsforsch. Bd. 61 H. 5/6)

著者ハペトロフ氏ヨリBCGノ分裂菌株R「コロニー」及S「コロニー」ノ分與ヲ受ケ之レヲ海狸ニ注射シテペトロフ氏ノ所謂S「コロニー」ガ海狸ニ對シ強毒結核菌ト同様ノ毒性ヲ有スルコトヲ確メタリ。更ラニ著者ハ自己ノ保存セルBCGヲ「グリヤリン」寒天平板培養基ニ形態的ニ異ナレル二種ノ「コロニー」ヲ分離シ得テ之レニR「コロニー」トS「コロニー」ト名付ケタリ。著者ノR

「コロニー」ハ全クペトロフ氏ノR「コロニー」ト同様ナリ。(S「コロニー」ハS「コロニー」ト異ナリ海狸ニ對スル毒性ナク尙ペトロフ氏ノS「コロニー」ノ注射海狸ハ「ツベルクリン」死ヲ來タスモ著者ノ(S「コロニー」ニテハ「ツベルクリン」死ヲ來タサズ。

要之著者ハ自己ノ保存セルBCGヨリ二種ノ異ナレル「コロニー」ヲ分離シ得タルモペトロフ氏ノ言フガ如キ強毒ナル菌株ヲ分離シ得ザリキ。(小野抄)

#### 55、「カピラールアクチーフ」ノ物質ノ結核菌ノ發育ニ及ボス影響ニ就イテ

von Dr. med. L. Medel.

(Zentralbl. f. Bakt. Orig. Bd. 113: H. 3/4 1919)

水ノ表面張力ヲ降下セシメル物質ヲ稱シテ「カピラールアクチーフ」ノ物質ト云フ。「プリメールアルコール」「エーテル」「エステル」「ケトン」「麻醉藥等」ニ屬ス。著者ハ是等ノ物質ヲ無蛋白培養基(表面張力一〇)ニ加ヘテ結核菌ヲ培養セルニ是等ノ物質ニヨリテ菌ノ發育ヲ阻止セシムル場合ニ其ノ表面張力ヲ計リシニ何レノ物質ヲ以テ阻止セシムル場合モ表面張力ハ〇・七ナリキ、而シテ表面張力ヲ〇・七以下ニ降下セシメ得ザル物質ニ於テハ發育ヲ阻止シ得ズ、「コレステリン」「パラフキン」ノ如キ水ニ「エムルション」トナラズシテ「ズスベンジオン」トシカナラヌ物質ハ結核菌ノ發育ヲ阻止セズ、尙是等ノ物質ハ「カピラールアクチーフ」ノ物質ト「アントゴニスト」トシテ作用スルモノニシテ「カピラールアクチーフ」ノ物質ヲ加ヘタル培養基ニ更ラニ此ノ物質ヲ加フル時ハ結核菌ノ發育ハ阻止サレズ。

此ノ事實ヲ證據トシテ著者ハ生體內ニ於ケル結核菌ノ發育甚ダ緩慢ナル理



由ヲ生化學的ニ論ジテ曰ク生體內ニ結核菌ノ侵入スルヤ其ノ發育ニ必要ナル「グリセリン」ヲ體構成要素「グリセリデー」ノ分解ニヨリテ得レドモ同時ニ分解シ來ル脂肪酸ハ「カピラールアクチーフ」ノ物質ナルヲ以テ結核菌ノ發育ヲ阻止スルナリ。

56、結核(菌)ノ證明ニ對スル動物實驗及培養法ノ比較

(小野抄)

(Zentralblatt f. Bakt. Bd. 114 H. 3)

著者ハクノル氏ノ結核菌證明方法ヲ改良シテ海狸ノ膝髌淋巴腺ノ所在部位ニ可檢材料ヲ注射セルニクノル氏法ニテノ皮膚創傷ニヨル死亡ヲ防グノミナラズ從前行ハレタル皮下或ハ腹腔内注射方法ニ比シテ相當良好ナル成績ヲ得タリ、即チ鏡檢上陰性ナル可檢材料三百五十例中著者ノ方法ニヨレバ十四%菌ヲ證明ス尙證明マテノ平均日數ハ二十日ナリ。皮下或ハ腹腔内注射方法ニテハ六・六%陽性ナリ。

ホーン氏其他ノ培養法ニヨル證明法ニ比シテ著者ノ方法ハ斷然優秀ナリ。(小野抄)

57、肺結核患者ニ於ケル耳及ヒ上氣道ノ臨牀的觀察(第三報 鼻所見)

(關根豐之助)

著者ハ肺結核患者千四十八名ニ就キテ、臨牀的檢査ヲ行ヒ、既ニ第一報トシテ、綜括的ニ統計的觀察ヲ、第二報トシテ、耳所見ヲ報告セリ。

總テノ檢査患者中鼻所見アルモノ五一八名ナリ。本篇ニ於テハ是等ノ所見ニ關シテ詳述セリ。然レ共、既ニ二三ノ學者ノ唱ヘタル如ク、鼻疾患ト肺結核

トノ關係即チ影響因果關係ニ就キテ言及セルモノニ非ズ。

著者ハ大體ニ於テ、鼻疾患ヲ非結核性ト結核性疾患トニ大別シ、前半ニ於テ非結核性疾患ヲ、年齢的、性別、肺結核病症別ニ觀察シ、是等ニ於ケル頻度及ビ所見ニ就キテ論ゼリ。乾燥性前鼻炎及ビ鼻入口部濕疹ハ、鼻中隔彎曲症ヲ除キテハ、最も多ク遭遇セル疾患ナリ。而シテ、此ノ疾患ハ肺結核ノ比較的進行性ナルモノニ多シ。

鼻結核ハ、肺結核患者ノ上氣道結核中、極メテ稀ナルモノニシテ、本觀察例ニ於テハ約〇・五%ヲ示セリ。

鼻結核ハ二十乃至三十歳間ニ觀ラレ、肺結核ノ進行性ナルモノニ多ク、肺結核ノミナラズ、一般症狀及ビ經過豫後等モ極メテ不良ナリ。

乾燥性前鼻炎、鼻入口部濕疹等ハ、鼻結核及ビ狼瘡等ノ初期ト鑑別困難ナルコト多シト、多數ノ報告ニ記載セラルレ共、本觀察例ニ於テハ、斯カル症例ヲ經驗セザリキ。

本鼻結核經驗例ハ鼻粘膜結核即チ鼻中隔軟骨部ヲ侵サレタルモノノミニシテ、主トシテ穿孔ヲ來セルモノナリ。

肉芽腫瘍組織ノ増殖等ヲ來セルモノニ遭遇セズ。

鼻結核ノ自覺的症候ハ極メテ輕微ニシテ、乾燥感、痂皮形成或ハ鼻閉塞、鼻出血ヲ訴フ。(自抄)

58、肺結核患者ニ於ケル耳及ヒ上氣道ノ臨牀的觀察(第四報 咽頭所見)

(關根豐之助)

著者ハ鼻ニ中耳結核ニ關スル記載ノ鈔キヲ記セルモ、咽頭及ビ扁桃腺結核等ニ關スル研究業績ハ更ニ稀ナリ。

扁桃腺ト肺結核トノ關係ニ就キテハ古來種々ノ研究報告アレ共、未ダ定説ナシ。著者ハ本篇ニ於テ該問題ニ直接觸レズ。

本篇ニ於テハ、咽頭疾患ノ外ニ、口腔疾患ノ二三ヲ加ヘタリ。肺結核患者千四八名中、咽頭及ビ口腔ニ所見アルモノハ、五八二名ニシテ、咽頭結核ハ一六三名(約一五%)、舌結核ハ五名(約〇・五%)ナリ。

非結核性咽頭疾患中、最も多キハ慢性單純性咽頭加答兒(二四八例)ニシテ、咽頭疾患ノ約半數ヲ占ム。而シテ青年及ビ壯年初期ニシテ、肺結核病勢ノ比較的停止性ナルモノニ多シ。口蓋扁桃腺肥大症ハ一三四例(約一三%)ニシテ、腺様増殖症ハ四六例(約四%)ナリ。扁桃腺肥大ハ年少者ニ特ニ多ク、且肺結核ノ比較的輕症ナルモノニ多シ。

咽頭結核潰瘍ノ最も多ク證明サル、ハ咽頭後壁ナリ。

鼻咽結核ハ稀有ナルモノトセラレタルモ、本觀察例ニ於テハ、二九例ヲ得タリ。他ノ咽頭結核性疾患ニ比シテ決シテ稀ナルモノニ非ズ。寧ロ比較的多キ疾患ナルベシ。

咽頭結核ノ約半數ハ二一乃至二五歳間ナリ。而シテ重症肺結核ノ滲出性進行性ナルモノニ多シ。

咽頭結核ニ於ケル頸部及ビ顎下部淋巴腺腫脹ハ甚ダ多數證明セラレ、且ツ兩者密接ナル關係アルモノト信ズ。

咽頭結核ノ大部分ハ常ニ喉頭結核ヲ合併ス。而シテ、肺結核一般症狀モ不長ニシテ、上氣道結核中最モ不長ヲ示セリ。

### 59、結核性腦膜炎ニ於ケル中性多核白血球核

#### 偏移ノ診斷的價值

(白抄)

稻松四郎(兒科雜誌第三五)

著者ハ Arneft 氏ノ分類ヨリ白血球偏移ヲ簡明ニ表示センガタメ核偏移率係數ヲ(K)ト假定シ(K)ノ増減ハ核偏移ノ消長ヲ指示スル最適ノ標準ナリト即チ(K)ノ増加ハ右方、其ノ減少ハ左方偏移ヲ示シ且ツソノ偏移ヲ數量的ニ確定サルト述ベテ居ル。

亦ソノ検査方法及ビ結核性腦膜炎(二十七例)ニ於ケル成績ヲ各々細密ニ述ベ小兒結核性腦膜炎ニ於テハアルチツト氏白血球核偏移ハ右方偏移ヲ示ス。尚多クノ症例ニ於テハ病勢進行スルニ從ヒ該右方偏移ハ高度ナルヲ以テ結核性腦膜炎ノ一補助診斷法トシテ臨牀上資スルコトヲ得ベシト述ベテ居ル。

(川上抄)

### 60、嗜血ヲ伴ヘルB型「バラチフス」症例

俣野純夫(日本傳染病學會雜誌第四卷第七號)

著者ハ加藤耕藏博士ノ大嗜血ヲ伴發セル型A「バラチフス」ノ一例報告ヨリ、偶然ニモ「バラチフス」B患者ノ經過中ニ嗜血ヲ起シタ一例ヲ經驗シタノヲ追加報告ヲナスト述べ、前者ハ「バラチフス」A菌ヨリ惹起シタ肺膿瘍ガ一部ハ胸壁ト一部ハ氣管枝ニ破レテ大出血ヲ起シタルモノト斷定サレテ居リ、後者ノ場合ハ前症例ノ如ク果シテ肺膿瘍ノ様ナモノヲ「バラチフス」B菌ニヨツテ形成シテコレヨリ起ツタ嗜血カ否カハ「レントゲン」寫眞ソノ他ニヨリ決定スベキデアルガ不幸X線寫眞ヲ以テ確診セザリキト、然シ過去ニ肋膜炎、肺炎加答兒等結核性疾患ナク尙退院後至極健康ノ點ヨリ想像スルニ肺結核ニヨル嗜血ト思考スルヨリ矢張「バラチフス」B菌ニヨリ肺膿瘍ニ膿瘍ヲ形成シ破レテ來タルモノト考ヘルト述ベテ居ル。

(川上抄)

### 61、結核性轉移性眼炎ノ補遺

Schöfer, O.: (Klin. Mtl. Augenheilk. 83, 1929.)

三十四歳ノ男子テ、肺結核ヲ有シ、屢々咯血ヲシテ居タモノガ右眼ニ炎症ヲ起シ疼痛ヲ訴ヘ、六週間後ニ失明シテシマツタ、高度ノ毛様充血アリ、前房ニハ血液ノ混在シタ滲出物がアツタ、眼歴上昇。

顕微鏡的ニ見ルト、視神經乳頭ニ結核性變化ガアリ、壊死ニ陥ツテ居タ、コノ壊死ハ全網膜ノ外層ニ及ビ全葡萄膜ニ淋巴細胞ノ浸潤ガアツタ、結核菌ヲ染色シテ見ルト、乳頭及ビ網膜ノ壊死ニ陥ツタ部分、硝子體ノ外層ニ證明スル事が出来タ。

此ノ轉移ハ勿論、菌ノ非常ナル繁殖ニ抵抗シ得ナイテ乳頭が侵サレ、次デ壊死ニ陥ツタモノト思ハレル。  
(植村抄)

## 62、結核菌ノ健康結膜侵入ニ對スル疑義

Chramelov, N.:  
(Russk. oftalm. 9, (Russisch))

著者ハ八匹ノ海狸ニ就テ、ソノ健康ナル結膜嚢ニ牛型結核菌ヲ點眼シテ實驗シタ、ソノ總テガ病理解剖細菌検査及ビ「レントゲン」撮影ニヨツテ全身結核ニ罹ツテ居ル事ヲ知ツタ、内三例ハ結膜ハ健康デアツタケレド、他ノ五例ハ結膜ニ定型的ノ結核性肉芽腫ヲ認メタ、以上ノ事實及ビ之マテノ文獻上カラ著者ハ結膜ヲ、呼吸器及ビ消化器ト同様ニ結核ノ侵入部位デアルト見做シタ。  
(植村抄)

## 63、實驗的角膜結核

Panico, Emanuele:  
(Ann. Oftalm. 57, 1929.)

家兎ノ角膜ヲ亂切シテ、結核ノ生菌及ビ加熱菌ヲ、角膜ノ中央、及ビ周邊部ニ接種シタ、又角膜實質内、前方ニモ行ツテ見タ。角膜ニ接種シタノテハ、

ソノ部ニ常ニ結節狀ノ浸潤ガ起リ、血管ヲ新生シタ、角膜ノ結核結節ハ最初ハ紅色テ約一ヶ月後ニ灰色トナリ遂ニ乾酪性變性ヲ來タシテ、崩壊ニ陥ツタ。ソノ全經過中結核菌ハ證明出来タケレドモ、巨大細胞ハ見出セナカッタ。約三ヶ月後ニハ癩痕化シテシマツタ。角膜ニ接種シタ時ハ病變ハソコダケニ止マツタケレド前房ニ入レタ時ニハ結核性虹彩炎ヲ起シタ。  
(植村抄)

# 會報並ニ雜報

## ○五月中新入會者

- 飯淵友磨 仙臺市東北帝國大學醫學部熊谷内科  
 村瀬一雄 名古屋市中區廣路町八事療養所内  
 大垣留吉 大分縣玖珠郡森町  
 山名利治 大阪府豊能郡麻田村刀根山病院内  
 山極三郎 奉天府滿鐵獸疫研究所内  
 仲子明 中華民國上海小南門外上海中學校内  
 高田敦二 廣島市西引御堂町  
 張效宗 千葉市寒川長洲九〇七杉田方  
 星野鎮一 三重縣三重郡富洲原町、東洋紡績會社富田工場醫局

## ○總會宿題及特別講演擔當者決定

明年四月東京市ニ於テ開催セラル、第九回日本結核病學會總會ニ於ケル宿題報告並特別講演者ハ左ノ如ク決定セリ。

- 宿題報告 醫學博士 今村 荒 男君  
 同 醫學博士 岡 治 道君  
 特別講演 醫學博士 坂 口 康 藏君

## ○歐文抄錄集發刊豫告

本來ノ計畫ナリシ本誌第一卷ヨリ第六卷迄ノ歐文抄錄集ハ今回發刊ニ着手セ

會報並ニ雜報

リ、右抄錄集御入用ノ方ハ部數ヲ學會事務所宛申込マレタシ。

## ○第八卷第五號高島彪雄、總會演說要旨正誤

頁	段	行	誤	正
五八七	上	二二	一例ハ比較的	一例ハ比較的
五八七	下	一四	↑	↑
五八七	下	二一	血痰ヲ混ズ	血痰ヲ混ゼズ

## ○第八卷第五號寺尾殿治論文(第二報)正誤

頁	行	誤	訂	正
四三六	13	阿片「アルカロイド」	「イソヒノリン」誘導體	
四三七	7	溶 易	容 易	
四三七	表題	4H-Chinohir	4H-Chinolin	
四四〇	1	$[\alpha]_D^{20} - 1.99^\circ$	$[\alpha]_D^{20} - 1.99^\circ$	
四四三	表題	Protopin hydroteroid	Protopin hydrobromid	
四四三	12	Dicentra pusilla Asahina <sup>1)</sup>	Dicentra pusilla (Asahina <sup>1)</sup>	
四四八	表題	Balbocapnin-mono-methyl-aether hydroteroid	Balbocapnin-mono-methyl-aether hydrobromid	
四四九	1	$[\alpha]_D^{20} + 2.97 \cdot 1$	$[\alpha]_D^{20} + 2.97 \cdot 1^\circ$	
四五五	6	H·CH <sub>3</sub>	N·CH <sub>3</sub>	

## ○第八卷第五號寺尾殿治論文(第三報)正誤

頁	行	誤	訂	正
四六一	14	。(石 割) <sup>1)</sup>	(石 割) <sup>1)</sup> 。	
四六四	1	五百分之一分及	五百分之一及	
四六八	12	Alkohol	Alkohol	
四七四	18	含メテ	含ムテ	
四八二	19	3) 石 割	13) 石 割	

七三七